個人の記憶に依拠した「場所」の抽出方法に関する基礎的研究～“自分史”に隠された記憶に着目して～

A BASIC STUDY ON EXTRACTING 'SEMANTICIZED SPACE' BASED ON PERSONAL MEMORIES: FOCUSING ON MEMORIES HIDDEN IN 'PERSONAL HISTORY

横山民斗 ―― ＊1

Minto YOKOYAMA―― ＊1

キーワード：
自分史，記憶，想起，場所，テキストマイニング，GIS

Keywords:
personal history, memory, recall, location, text mining, Geographic Information System

In the pursuit of convenience and rationality, inorganic spaces have been created and the identity of "place" has been lost. This study aims to conduct basic research on how to extract "place" from personal memories, or "personal history," and to develop a process for capturing important elements of a town.

1.研究背景と目的

都市における利便性や合理性を求める機能主義的なプランニングは、無機質な空間が形成され、人間本来の豊かさが失われる可能性がある。この概念を「没場所性（placelessness）」として E.Relph は指摘している[1)]。近年は、少子高齢化や環境問題などの変化への対応、新型コロナウイルス感染症の流行や東日本大震災などの急激な変化への対応が迫られているが、その中でも無機質な空間形成を防ぐため、住民個人の意識や無意識的な愛着など人間の心の全体像に焦点を当てた、人間主義的な文脈への変化を加速させる方法論の構築が求められている。

人間の豊かさを構成する要素は、有形なものだけでなく無形なものも含まれるため複雑である。そのため、日常の記憶を明らかにすることで研究が進められている。日常の記憶を収集する際には「生活景[2)]」「心象風景[3)]」「原風景[4)]」など多様な景観表現が用いられ、被災地における街空間の復興や歴史的市街地の継承、観光エリアでの資源発掘などへの活用を目指し行われている。ただし、これらの活動における個人の記憶を尋ねるプロセスには、以下①～③の手法的な課題がある。

①多くの調査・分析において、住民が想起する場所や期間、テーマを設定しているため、抽出される記憶が限定される。住民から多様な要素を深堀りできるような方法を探る必要がある。

②日常の記憶の収集には時間と予算の確保が必要となる。実際のまちづくりへの活用にあたり、作業の時間と予算が限られているため、効率的な方法論が求められている。

③記憶は「あいまい」であるため、その活用価値の顕在化や客観性の欠落、計画への反映などの点で活用の課題があるため、それら課題が考慮された具体的な方法の構築をすべきである。

これらの記憶が持つ側面を踏まえた分析が必要である。

一方で、「書のまち」愛知県春日井市では、記憶をアーカイブする貴重な文化活動として“自分史（人生を書き綴る）”活動が積極的に取り組まれている。“自分史”には、個人の意識や無意識的な愛着などの心の様相や、それを構成する要素が描かれていることが考えられるが、まちづくりへの活用は試みられていない[注1)]。

以上の認識から本研究では、心の様相が幅広く記された“自分史”から、記憶を収集する一般化された手法では抽出が難しい要素、及び、個人にとっての豊かさを育む「意味づけられた空間」（「場所」）を把握できるのではないかという仮説のもと、“自分史”を活用する上での基礎的な洞察をした上で、“自分史”から「場所」を抽出する手法の有効性を示すことを目的とする。その上で、地域で大切な「場所」を捉えるための 1 つのプロセスの構築を目指す。

2.研究の枠組み

2.1.「場所」の概念と本研究の位置づけ

環境心理学や地理学、都市論を含む多様な分野で「場所」に関する議論がなされているが、Y.Tuan は単に物理的な空間を示すものではなく「意味づけられた空間」として区別している[5)]。そして、その意味づけを判断する際には、人物の特性や出来事、そこで抱いた感情などの背景情報が複雑に関係していることが予測できる。つまり、「場所」を抽出するには多様な背景情報が含まれるデータに基づき調査・分析する必要があると考える。住民の記憶を収集するための主な手法として用いられるワークショップでは、対象地域における証言から記憶を抽出する場合が多い。ただし、ここで得られるのは記憶の「断片」であり、より多くの情報を継続的に収集し活用する手法に関して研究したものはあまりみられない。“自分史”は空間を意味づける多様な背景情報を知るデータとして期待でき、その積極的な抽出を試みるべきであると考える。

また、住民の記憶を収集し日常を明らかにする研究が多方で進められているが、その収集の場において本来抽出したい本質的な要素が抜け落ちてしまう場合は存在する。具体的に、表 1 に示すような記憶を挙げることができる。本研究では、住民の記憶を収集するプロセスとしての“自分史”のポテンシャ

表 1　本研究における語の定義

本研究で用いる語	記憶が隠されやすい理由	内容の一例
話せない記憶	覚えていないから・忘れてしまったから	幼少期に遊んだ記憶
話したくない記憶	悲劇や失敗などの思い出したくないから	災害に遭った記憶
話さない記憶	価値を自覚していないから・話す機会がないから	日常会話の記憶
話すべきではない記憶	言及により社会的な意味を生んでしまうから	政治に関する記憶

*1 中部大学大学院工学研究科建設工学専攻　大学院生
（〒487-8501　愛知県春日井市松本町 1200）

*1 Department of Construction Engineering, Graduate School of Engineering, Chubu University

ルを明らかにするため、これらの住民意識の中に隠されやすい要素を4つに分類し「話せない記憶」「話したくない記憶」「話さない記憶」「話すべきではない記憶」とした。これらが“自分史”におけるどの文脈で顕在、及び潜在していると考えられるかに着目しながら分析を進める。

2.3.研究方法

本研究の 3.～5.では「場所」を抽出するプロセスとして“自分史”を活用する上での基礎的な洞察を得て、6.では「空間」を意味づける背景情報に着目しながら対象地域内の「場所」の抽出を試みる。

3.ではどのようなプロセスを経て「空間」が“自分史”に描かれるかを把握するため、春日井市内で活動する“自分史”サークルでの“自分史”の作成プロセスについてヒアリングを行う。4.では、“自分史”活動が書き手に及ぼす影響を把握するため、書き手が感じる過去の生活地域に対する認識や想いの変化を“自分史”サークル会員へのアンケートを通じて明らかにする。次に、春日井市に所在する日本自分史センターの蔵書をもとに分析を行う。分析の流れを図1に示す。“自分史”原本をOCRソフトでテキストデータ化したのち、5.では、テキストマイニングソフトKHCoderを用いてテキストマイニングを行い、“自分史”に多く描かれているテーマを把握する。頻出語を特定したのち、語の共起関係[注2)]を探ることで、「空間」や「人物・活動・感情」などの空間を意味づける背景情報に関する語の用いられ方を把握し、定量的な言語パターンを明らかにする。また、生成AI（チャットGPT）を活用して、空間における活動の有無を判断し、書き手が訪れた「空間」のみを抽出した。活用時の入力・出力内容は図2に示す。なお、検証を行った際に出力の誤りが少々みられたためあくまでも補助的な活用に留め、確認作業を行うことで作業の精緻化を図った。

6.では、“自分史”から「場所」の抽出を試みるため、原本データから評価対象地内の「書き手が訪れた空間」とそこでの「活動」を抽出し、立地、及び活動種別について ArcGIS を用いて視覚化を行う。さらに、その「訪れた空間」から「書き手が感情抱いた空間」を抽出し、立地、及び記載されている感情表現の視覚化を行うことで、「場所」の特性について定性的に明らかにする。

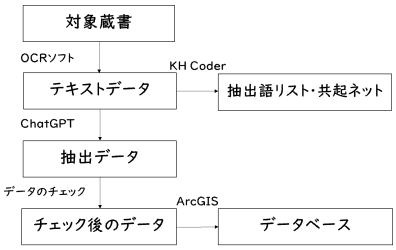

図1　蔵書分析の流れ

入力内容	出力内容（一部引用）
#指示 以下の制約条件に従って、入力する文章を整理してください。 #制約条件 ・文章中の「空間」を全て抽出し、その空間における「活動」を表にまとめる。 ・活動は可能な限り短くまとめる。 ・文章の意味を変更しない。 ・架空の表現や言葉を使用しない。 #入力する文章 （エピソードを入力） #出力形式 整理した表:	空間 ／ 活動 自宅 ／ 車買い替え考案 展覧会会場 ／ 絵画搬入搬出 有峰湖 ／ 描画活動 吉野山 ／ 描画活動 佐渡島 ／ 描画活動 富士五湖 ／ 旅行 車検所 ／ 車検実施

図2　生成AIの活用における入力・出力内容

3.自分史サークルにおける“自分史”の作成プロセス

春日井市で活動を行っている“自分史”サークルにおいて、“自分史”の作成プロセスを分析するため、各サークルの会長に対してヒアリングを行った。調査の概要を表3に示す。調査から、サークル会員は、1～2回の月例会に参加しており、月例会では会員各自が持ち寄った“自分史”を発表していることが明らかになった。そして、発表作品の中から各自作品を持ち寄り2～4か月の期間で会誌を作成していると言及していた。

渡辺は、心象風景の形成過程について整理している[6)]。このプロセスと“自分史”が描かれるプロセスを比較すると、“自分史”活動には心象風景にならない要素を思い出すような仕組みがある。また、月例会の合評の場で内容について指摘しあうことで、制限される要素があると考え、既往研究で示されているプロセスよりも複雑化していることが明らかになった。調査で明らかになった“自分史”の執筆までのプロセスと既往研究における都市空間の認識プロセスを踏まえて、会誌の作成プロセスの概念図を仮説として作成した（図3）。空間の経験を通じて知覚し、その知覚要素の中から個人ごとで異なる解釈により、その要素が構造化され、認知要素が形成される。認知要素は忘却され、想起できる記憶要素のみが残る。ただし、そこで忘却された要素は月例会での“自分史”によって誘発される可能性があり、その誘発要素を含んだ記憶が執筆に用いられる。そしてガイドラインの遵守や校正などにより推奨要素のみに絞られ、記述内容の最終決定を通じて“自分史”が描かれる。

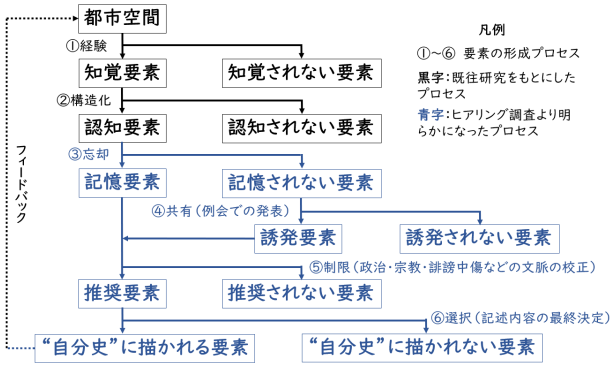

図3　「空間」が“自分史”に描かれるまでのプロセス（筆者が仮説的に作成）

4.“自分史”が書き手に及ぼす効果

“自分史”が書き手に及ぼす効果を分析するため、“自分史”サークルに所属する会員に対しアンケート調査を実施した。調査の概要を表4に示す。最も大規模であった春日井エッセイクラブ（以下、KC）を含む2団体の月例会参加者に対し、配布する形で調査を行った。日曜ペンクラブでは5枚、KCは56枚、合計61枚の回答を回収した。

回答者の属性を図4～6に示す。性別は女

表3　“自分史”作成プロセスの実態調査の概要

団体名	日曜ペンクラブ	かすがいエッセイクラブ	自分史を書こう会	まいしゃの会	東部自分史友の会	自分史聴き書きの会
実施方法	対話形式	対話形式	メールでの調査票送付	対話形式	メールでの調査票送付	休会状態
調査時期	2023/10/15 10:30～11:30	2023/10/17 16:00～17:00	送付日：2023/10/13 回収日：2023/10/23	2023/11/9 15:30～16:30	送付日：2023/10/11 回収日：2023/11/9	
対象者	会長：I・C氏	講師：H・M氏 会長：K・Y氏	会長：O・S氏	会長：N・S氏 会員：12名	会長：K・K氏	まいしゃの会会長 ：N・S氏

性より男性の割合が 20.0%多く、世代としては 70 代が 50.8%を占めた。定年退職前の職業は、会社員や公務員、専業主婦など多様な回答者がみられた。

“自分史”活動（例会）への参加回数と地域に対する想いや認識の変化に関する効果の相関を表 5 に示す。地域に対しては「地域社会の一員だと認識した（29.8%）」「地域のなくてはならない文化（お祭り・イベント）を認識した（23.4%）」「日常の生活圏を認識した（34.0%）」などの項目の回答者が比較的多かった。特に、「地域社会の一員だと認識した」の項目は回答者の参加回数に応じて回答の割合が高くなっている傾向があった。

表 4　アンケート調査の概要

団体名	日曜ペンクラブ	かすがいエッセイクラブ
実施方法	月例会での配布	月例会での配布
配布日	2023/10/15	2023/10/31
回収日	2023/10/15	2023/11/21
回収数	5枚	56枚

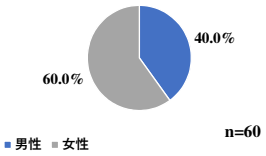

図 4　性別

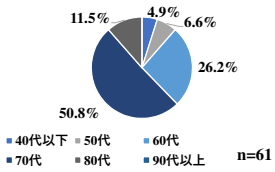

図 5　世代

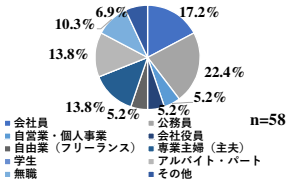

図 6　職業（前職）

表 5　「“自分史”活動（例会）への参加回数」と「過去の生活地域に対する認識や思いの変化」の相関

参加回数	1回～50回	51回～100回	101回以上
回答人数	15	12	20
地域に住み続けたいと思うようになった	6.7%	0.0%	5.0%
地域への愛着が湧いた	40.0%	8.3%	15.0%
地域のなくてはならない場所を認識した	13.3%	16.7%	10.0%
地域社会の一員だと認識した	6.7%	33.3%	45.0%
地域のなくてはならない文化（お祭り・イベント）を認識した	20.0%	33.3%	20.0%
日常の生活圏を認識した	20.0%	50.0%	35.0%
地域活動への参加意欲が高まった	6.7%	25.0%	10.0%
わからない	13.3%	16.7%	15.0%
変化はなかった（集計時に項目を追加）	13.3%	8.3%	10.0%
その他	0.0%	0.0%	5.0%

5.“自分史”に描かれる記述の特性

5.1.蔵書分析の概要

春日井市に所在する日本自分史センター及びその書庫には、11,304 冊の蔵書が保管されている。本研究は蔵書に描かれる「空間」や「人物・活動・感情」などの空間を意味づける背景情報に関する語の出現パターンを明らかにする。対象蔵書は春日井市内の場所が量的に多い点、現在の執筆のプロセスが明らかになっている点を考慮し、過去 5 年間（2018 年度～2022 年度）で春日井市内の“自分史”サークル描かれた会誌 46 冊を対象とした。

5.2.頻出語と頻出テーマ

KHCoder で対象とする蔵書のテキストを読み込み、「抽出語リスト」機能において品詞体系を指定したのち、品詞別の頻出語上位 20 語を抽出した（表 6）。また、これらの語の中で「空間」「人物」「活動」「感情」を表す語を色付きで示した。「空間」を表す語としては「家（321 個）」「春日井（170 個）」、「人物」を表す語としては「自分（427 個）」「母（241 個）」が挙げられた。また「子（215 個）」「子供（151 個）」といった子どもを表す同義の語もみられ、合計すると 2 番目に頻出する「人物」を表す語であった。「活動」を表す語としては、「見る（420 個）」「食べる（190 個）」、「感情」を表す語としては「楽しい（89 個）」「好き（57 個）」などが挙げられた。また、頻出のテーマを分析するため、対象テキストを用いて共起ネットワーク図を作成した（図 6）。なお、語の出現数と円の大きさは比例関係にあり、強い共起関係ほど濃い線で表している。結果を踏まえ、自動で描画されたサブグラフ（色分け）を参考に、描画された語に関して原本データにおける文脈の確認作業を行った結果、以下のような 4 つの頻出テーマが推測された。

T1：ビッグイベントとそれに紐づく地名・時間に関して

T2：自分史の読み書き、“自分史”サークル参加時の様子に関して

T3：学生時代の思い出に関して

T4：家族と過ごした記憶、家族に起きた出来事に関して

表 6　抽出された頻出語

抽出した品詞体系			抽出した品詞体系			抽出した品詞体系		
名詞・名詞B・名詞C・地名・固有名詞・組織名			動詞			形容詞・形容動詞		
順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数
1	人	543	1	思う	535	1	自然	137
2	自分	427	2	言う	464	2	多い	130
3	家	321	3	見る	420	3	大きい	127
4	年	242	4	行く	304	4	楽しい	89
5	母	241	5	出る	266	5	良い	80
6	子	215	6	来る	212	6	長い	79
7	先生	210	7	入る	207	7	新しい	75
8	手	203	8	持つ	197	8	必要	73
9	目	197	9	食べる	190	9	早い	70
10	月	194	10	知る	163	10	強い	68
11	言葉	185	11	考える	161	11	高い	66
12	父	185	12	出来る	150	12	無い	63
13	春日井	170	13	聞く	141	13	悪い	59
14	夫	165	14	行う	136	14	好き	57
15	心	164	15	書く	133	15	小さい	56
16	日本	155	16	作る	126	16	幸せ	55
17	山	153	17	出す	123	17	安全	53
18	子供	151	18	歩く	123	18	元気	51
19	声	151	19	帰る	106	19	少ない	51
20	花	145	20	読む	101	20	大切	51

空間を表す語　人物を表す語　活動を表す語　感情を表す語

※KHCoder の検索語に基づき、筆者が色付き部分の語の抽出を行った。

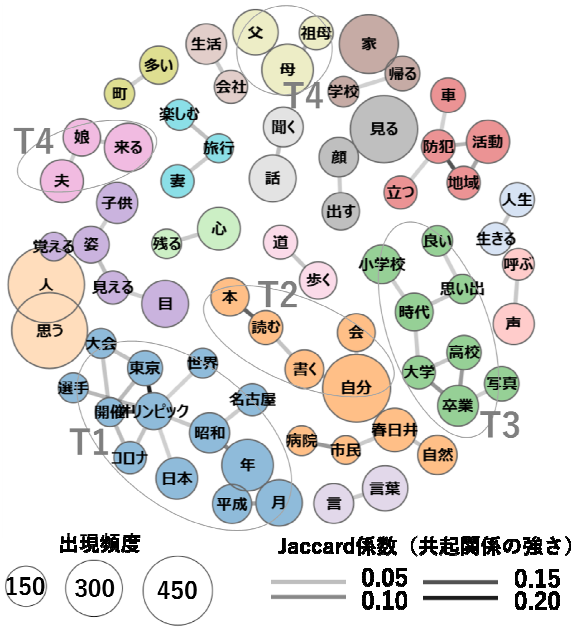

図 7　語の出現頻度と共起関係からみた言語パターン

表 7　活動分類別の想起場所

行動	性別	場所数 (=n)	抽出場所																	
			地名	自然物				人工物												分類不可
				山	水辺	農地	その他	医療施設	交通施設	教育施設	公共空地	文化施設	宿泊施設	住宅施設	宗教施設	福祉施設	生活施設	業務施設	その他	不明
1次活動	男性	213	46.5%	0.9%	1.9%	0.9%	1.4%	0.9%	1.9%	0.9%	0.5%	0.5%	5.6%	20.7%	0.5%	0.5%	8.9%	1.4%	5.6%	0.5%
	女性	216	35.2%	2.3%	0.9%	1.9%	4.2%	1.9%	1.9%	1.9%	0.5%	0.0%	3.7%	23.6%	2.8%	0.5%	16.2%	0.0%	2.8%	0.0%
	不明・その他	7	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%
2次活動	男性	363	17.9%	0.0%	0.3%	1.7%	0.0%	3.0%	1.4%	17.6%	0.8%	0.0%	0.0%	7.7%	2.8%	0.8%	16.3%	25.9%	3.9%	0.0%
	女性	227	14.5%	0.4%	0.9%	3.5%	0.4%	3.5%	1.3%	28.2%	0.9%	0.0%	0.9%	9.7%	0.0%	3.1%	21.6%	9.7%	1.3%	0.0%
	不明・その他	16	12.5%	0.0%	0.0%	31.3%	0.0%	6.3%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	6.3%	6.3%	6.3%	6.3%	0.0%
3次活動	男性	1928	20.1%	6.7%	5.0%	2.4%	4.1%	7.8%	8.8%	4.1%	2.1%	2.4%	3.1%	8.2%	6.2%	0.8%	5.1%	2.5%	10.0%	0.5%
	女性	1503	17.1%	3.9%	7.1%	2.5%	3.7%	11.2%	5.6%	5.1%	3.2%	2.9%	2.6%	10.0%	6.3%	0.7%	6.4%	1.3%	9.4%	1.0%
	不明・その他	79	22.8%	13.9%	3.8%	3.8%	5.1%	6.3%	8.9%	2.5%	1.3%	3.8%	3.8%	12.7%	2.5%	1.3%	1.3%	0.0%	6.3%	0.0%
分類不可	男性	84	29.8%	1.2%	4.8%	2.4%	3.6%	2.4%	8.3%	6.0%	2.4%	1.2%	1.2%	11.9%	7.1%	0.0%	4.8%	6.0%	6.0%	1.2%
	女性	62	21.0%	1.6%	8.1%	3.2%	4.8%	11.3%	1.6%	8.1%	0.0%	1.6%	1.6%	11.3%	6.5%	0.0%	6.5%	1.6%	9.7%	1.6%
	不明・その他	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表 8　活動の分類項目

活動区分	凡例
1次活動	睡眠・食事など
2次活動	仕事・学業など
3次活動	趣味・娯楽など

表 9　場所の分類項目

大分類	小分類	凡例
地名	地名	愛知県・春日井市など
自然物	山	森・山道など
	水辺	川辺・海岸・堤防・湖・池など
	農地	畑・田など
	その他	上記以外の場所
人工物	医療施設	病院など
	交通施設	道路・駅・飛行場など
	教育施設	学校・塾など
	公共空地	広場・公園など
	文化施設	図書館・動物園・スポーツ施設など
	宿泊施設	ホテル・民宿など
	住宅施設	家・団地など
	宗教施設	寺社・寺院・墓地など
	福祉施設	老人ホーム・児童福祉施設など
	生活施設	スーパー・郵便局など
	業務施設	オフィス・事務所など
	その他	上記以外の場所

5.3.“自分史”に描かれる書き手が「訪れた空間」の特性

生成 AI（チャット GPT）を活用して書き手が訪れた「空間」のみを抽出するため、その空間における「活動」の有無を明らかにした。その後、書き手がどのような「空間」でどのような「活動」を行っている記述が多いか、量的なイメージを明らかにするため、「空間」の種別と「活動」の種別を分類し、クロス集計を行った（表 7）。分類項目の凡例を表 8・9 に示す。996 個のエピソードを対象とし、総計 4,698 個の「訪れた空間」が抽出された。

「空間」の種別に関しては、家・団地などの「住宅施設」やスーパー・郵便局などの「生活施設」の割合が比較的高かった。「活動」の種別に関しては、趣味・娯楽などの「3 次活動」の割合が比較的高かった。オフィス・事務所などの「業務施設」における「2 次活動」の割合は男女で差がみられ、女性よりも男性の方が 16.2%多くみられた。

6.“自分史”から抽出された「空間」

6.1.春日井市内における「訪れた空間」の分布

5.で抽出した「訪れた空間」の中でも、春日井市内の特定の座標が示せる空間を抽出し、ArcGIS を用いてその座標を描画した（図 8）。①～⑥における春日井市内の空間の分布を図に示す。中東部（④の下方）、北部（⑥の上方）など部分的に想起場所がみられない箇所があった。

6.2.地域別にみた「訪れた空間」とその活動種別

“自分史”に描かれる「空間」とそこで行った活動の種別に関して、①～⑥の地域別で地図にまとめ、視覚化を行った（図 9～14）。以下、明らかになった春日井市内における活動内容の特性を地域別に示す。

①南部地域における「訪れた空間」と活動種別

南部地域では「JR 勝川駅（4 個）」「春日井市立小野小学校（3 個）」「春日井市柏井町八幡社（2 個）」などが主要な「訪れた空間」として挙げられた。JR 勝川駅は 3 次活動の場として想起されており、春日井市立小野小学校は 2 次活動、3 次活動の場として想起されていた。

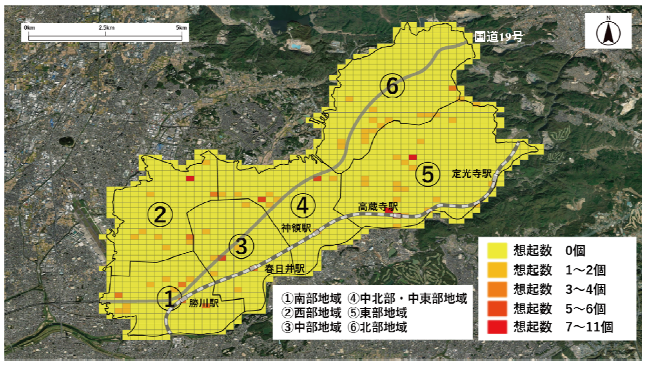

図 8　春日井市内における「訪れた空間」の分布

②西部地域における「訪れた空間」と活動種別

西部地域では「春日井市民病院（11 個）」「朝宮公園（3 個）」「春日井市立鷹来中学校（2 個）」などが主要な「訪れた空間」として挙げられた。春日井市民病院は 1 次活動、2 次活動、3 次活動の場として想起されており、朝宮公園は 3 次活動の場として想起されていた。

③中部地域における「訪れた空間」と活動種別

中部地域では「春日井駅（4 個）」「春日井市民会館（4 個）」「春日井市役所（2 個）」が主要な「訪れた空間」として挙げられた。春日井駅・春日井市民会館は 3 次活動の場として想起されていた。春日井市役所は 2 次活動・3 次活動の場として想起されていた。

④中東部・中西部地域における「訪れた空間」と活動種別

中北部・中東部地域では、「潮見坂平和公園（5 個）」「落合公園（3 個）」「落合池（2 個）」が主な「訪れた空間」として挙げられた。潮見坂平和公園・落合公園・落合池・春日井グリーンパレスは 3 次活動の場として想起されていた。

⑤東部地域における「訪れた空間」と活動種別

東部地域では「高蔵寺駅（11 個）」「徳洲会病院（8 個）」「春日井市民東部市民センター（7 個）」「高森台バス停（2 個）」「春日井植物園（2 個）」「道樹山（2 個）」などが主に想起されていた。高蔵寺駅は 2 次活動・3 次活動を行う場として挙げられていた。徳洲会病院では 1 次活動・3 次活動を行う場として想起されていた。春日井市民東部市民センターは、3 次活動を行う場として想起されていた。春日井植物園・道樹山・高森台バス停は 3 次活動を行う場として想起されていた。

⑥北部地域における「訪れた空間」と活動種別

北部地域では、「弥勒山（3 個）」「東海記念病院（2 個）」「愛知県療育総合センター（2 個）」「築水の森（2 個）」などが主な「訪れた空間」として挙げ

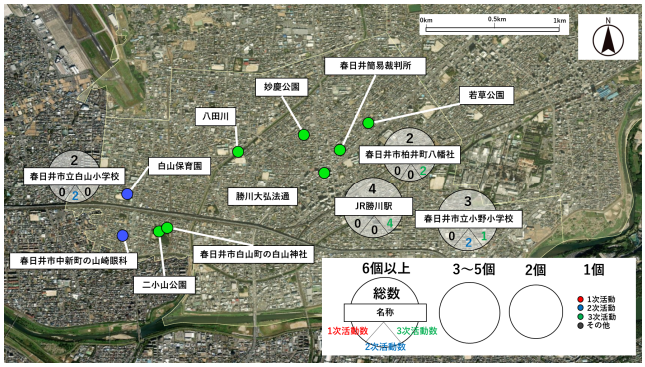

図 9　南部地域の「訪れた空間」と活動種別

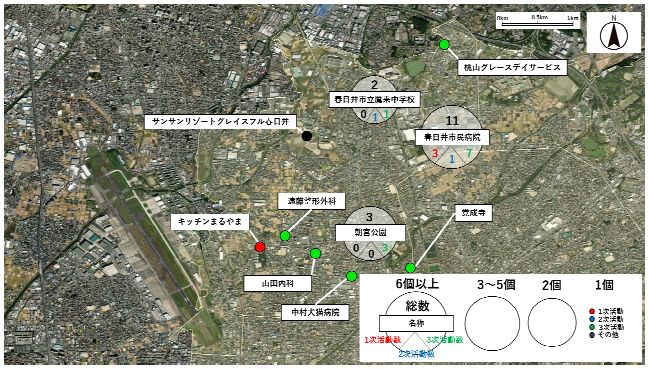

図 10　西部地域の「訪れた空間」と活動種別

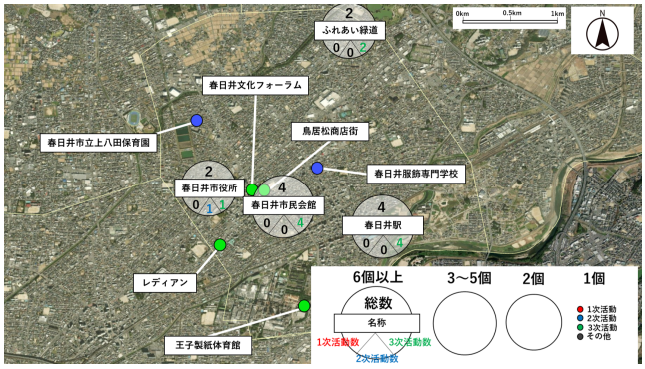

図 11　中部地域の「訪れた空間」と活動種別

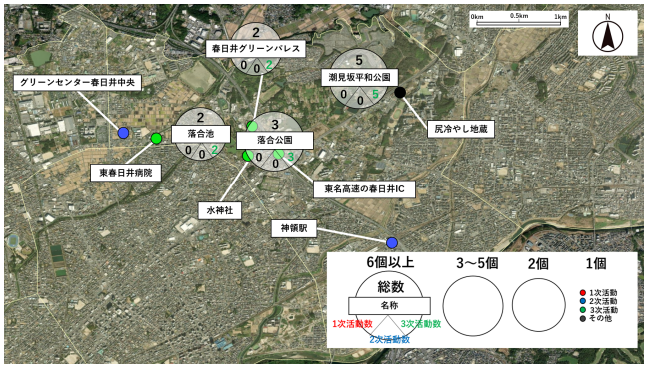

図 12　中北部・中東部地域の「訪れた空間」と活動種別

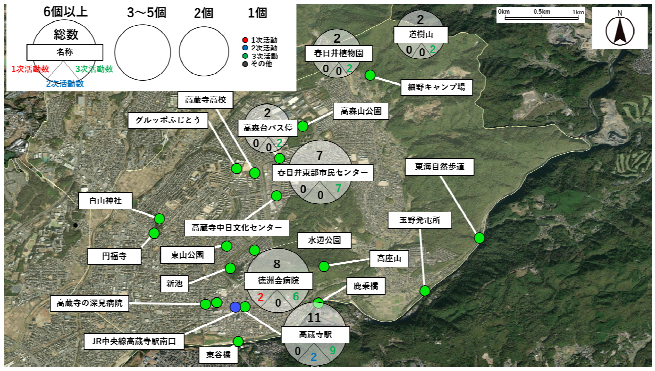

図 13　東部地域の「訪れた空間」と活動種別

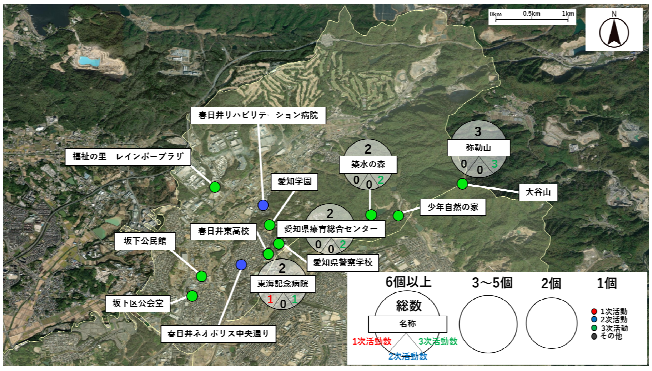

図 14　北部地域の「訪れた空間」と活動種別

られた。弥勒山・築水の森・愛知県療育総合センターは 3 次活動の場として想起されていた。東海記念病院は 1 次活動・3 次活動の場として想起されていた。

6.3.地域別にみた「感情を抱いた空間」とその感情

①～⑥の地域別に“自分史”に描かれる「感情を抱いた空間」とその感情を地図にまとめ、視覚化を行った（図 14～19）。以下、明らかになった春日井市内における「感情を抱いた空間」とその感情を地域別に示す。

①南部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

南部地域では、「妙慶公園」「春日井市立白山小学校」「春日井市白山町の白山神社」「春日井市中新町の山崎眼科」「JR 勝川駅」「春日井市立小野小学校」が「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に、妙慶公園では「今年の春はおよそ十日間、歩き始めて六百メートル先の妙慶公園周辺でケキョケキョからホーホケキョと上手になるまで毎朝、ウグイスのさえずりを楽しませてもらった」という記述があり、公共空間におけるポジティブな感情を形成する生物、その感情を形成するに至る季節・時間帯、空間の範囲が言及されていた。

②西部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

西部地域では「サンサンリゾートグレイスフル春日井」「遠藤整形外科」「山田内科」「中村犬猫病院」「覚成寺」「桃山グレースデイサービス」「春日井市民病院」「朝宮公園」「春日井市立鷹来中学校」などが「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に、朝宮公園では「大きな遊具施設が朝宮公園にできたと名古屋に嫁いでいる娘より聞いた。灯台下暗しで、こんなところがあるなんてと、行ってみて驚いた」という記述があり、地域における人口環境の変化に対するポジティブな反応がうかがえた。また、覚成寺では、「思った通り桜は満開でした。境内には私たち夫婦とお墓参りの男性一人、風もなく穏やかなお花見です」という記述があり、家族で過ごした季節行事の様子を表す言葉が綴られていた。

③中部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

中部地域では「春日井駅」「春日井市民会館」「春日井文化フォーラム」「レディアン」「鳥居松商店街」「春日井服飾専門学校」が「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に、鳥居松商店街は「夏には、商店街に七夕まつりが催されて、金魚すくい、輪投げ、抽選会などがあり幼子を連れて楽しんだ。」

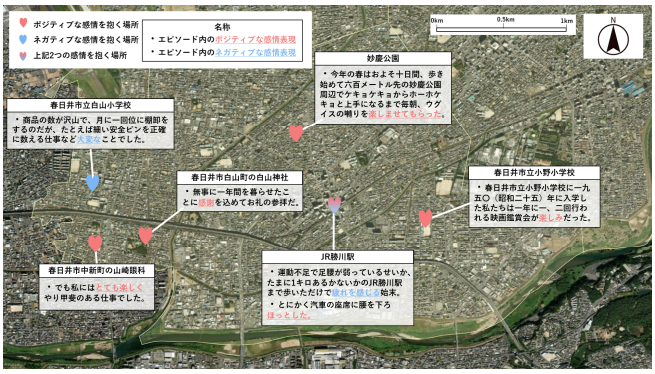

図 15　南部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

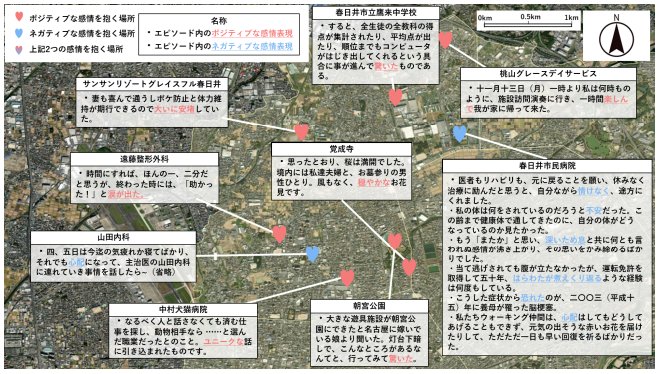

図 16　西部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

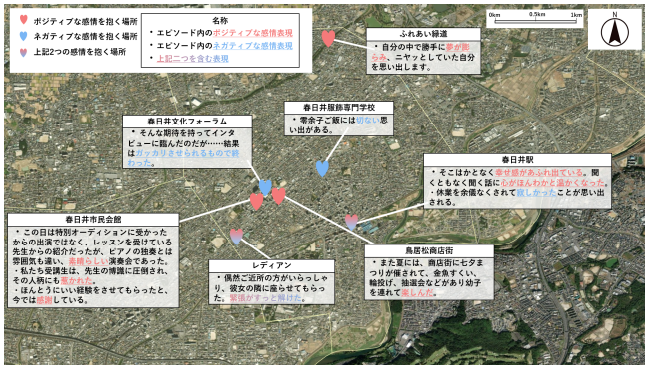

図 17　中部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

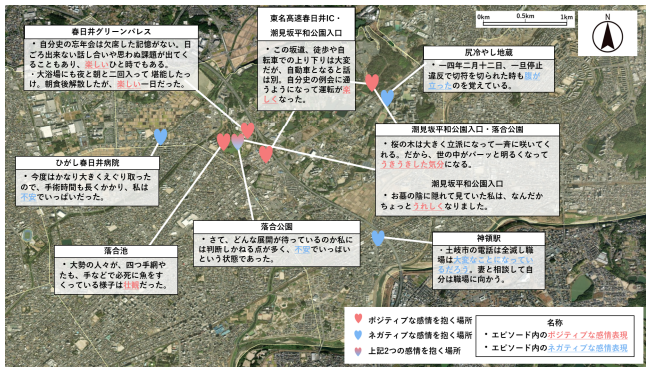

図 18　中北部・中東部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

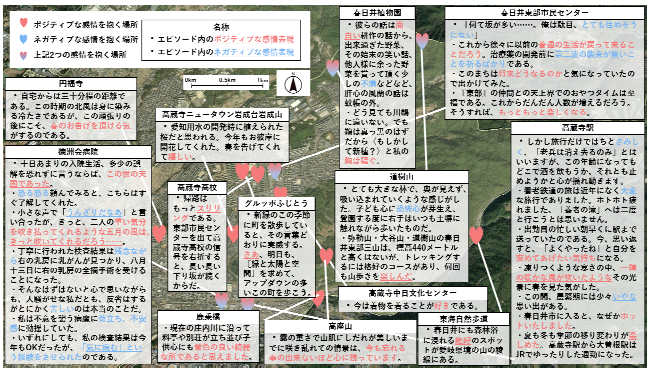

図 19　東部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

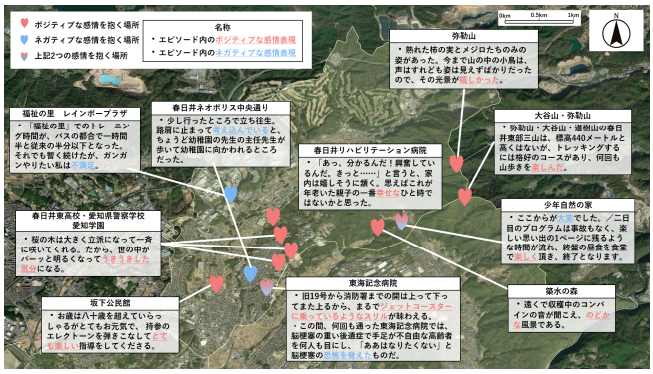

図 20　北部地域の「感情を抱いた空間」とその感情

という記述があり、季節のイベントの様子とそこで抱いた感情を形成する要素が言及されていた。

④中北部・中東部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

中北部・中東部地域では、「潮見坂平和公園」「落合公園」「落合池」「東春日井病院」「春日井グリーンパレス」「東名高速春日井IC」「尻冷やし地蔵」「神領駅」が「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に、潮見坂平和公園入口・落合公園では、「桜の木は大きく立派になって一斉に咲いてくれる。だから、世の中がパーッと明るくなってうきうきした気分になる。」という記述があり、季節ごとに変化する自然環境の変化に対するポジティブな反応がうかがえた。また、落合池は「大勢の人々が、四つ手網やたも、手などで必死に魚をすくっている様子は壮観だった。」という記述がみられ、地域コミュニティの活動の様子やその活動に対する印象が言及されていた。

⑤東部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

東部地域では抽出した「感情を抱いた空間」の量が最も多かった。「高蔵寺駅」「徳洲会病院」「春日井市民東部市民センター」「高森台バス停」「春日井植物園」「道樹山」「円福寺」「高蔵寺高校」「鹿乗橋」「高座山」「高蔵寺中日文化センター」「東海自然歩道」「グルッポふじとう」が「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に、高蔵寺駅は「春日井市に入ると、なぜかホッといたしました」という記述があり、地域間の移動による心の動きが言及されていた。春日井東部市民センターでは、「何て坂が多い……。俺は駄目、とても住めそうにない」といった記述があり、空間的要素に対するネガティブなイメージがみられた。高座山では、「露の重さで山肌にしだれが美しいまでに咲き乱れての情景は、今も忘れる事の出来ないほど心に残っています。」といった記述があり、地域の自然景観の変化に対するポジティブな印象や、その印象の強さがみられた。

⑥北部地域における「感情を抱いた空間」とその感情

北部地域では、「弥勒山」「東海記念病院」「築水の森」「福祉の里レインボープラザ」「春日井東高校・愛知県警察学校・愛知学園」「坂下公民館」「少年自然の家」「大谷山」「春日井ネオポリス中央通り」が「感情を抱いた空間」として挙げられた。特に築水の森では「遠くで収穫中のコンバインの音が聞こえ、のどかな風景である。」といった記述がみられ、地域の自然環境に対する印象や、その空間での音環境の言及が抽出された。

7.まとめと考察

7.1.個人の記憶からみた「場所」と行政・専門家に向けての“自分史”活用

本研究では、“自分史”に描かれる個人の記憶から、空間を意味づける背景情報である「感情」に着目し、「場所」の抽出を試みた。これを踏まえ、次のように類型化された「場所」が抽出できたと考える。

①日常の生活スケール・空間のまとまりが描かれた場所

事例：歩き始めて 600m の明慶公園の周辺では春の朝、ウグイスの囀りが約十日間程度聞こえ、その間囀りが変化していた（南部地域）

②周辺の音環境が描かれた場所

事例：築水の森では、遠くで収穫中のコンバインの音が聞こえ、のどかな風景がみられた（北部地域）

③自然環境の変化に対する印象が描かれた場所

事例：高座山では、枝垂れが咲き乱れ、今も忘れることができないほど心に残っていた（東部地域）

④人口環境の変化に対する印象が描かれた場所

事例：朝宮公園の大きな遊具施設の設置が、住民にインパクトを与えていた（西部地域）

⑤イベントに訪れた人物の属性、組み合わせが描かれた場所

事例： 鳥居松商店街では、夏に七夕まつりが催され、金魚すくい・輪投げ・抽選会などが親子で楽しまれていた（中部地域）

⑥自分でも理解できない愛着が描かれた場所

事例：高蔵寺駅では、春日井市外から春日井市内への移動した際、なぜか安心感や居心地の良さがあった（東部地域）

⑦子どもの頃に印象を持った視点場・視対象が描かれた場所

事例：鹿乗橋では、庄内川に沿って料亭や別荘が立ち並び、子ども心にも景色の良いきれいな所であると思っていた（東部地域）

⑧精神的な安らぎ・癒しが感じられる場所

事例：東海自然歩道では、森林浴に浸れるスポットとして認識されていた（東部地域）

⑨コミュニティ活動に対する印象が描かれた場所

事例：四つ手網やたも、手などで必死に魚をすくっている様子を壮観だと思っていた（中北部・中東部地域）

以上を踏まえ“自分史”は、都市のプランニングを行う上で考慮したい「有形要素や無形要素を含む多様なまちづくり要素のまとまりや組み合わせを抽出することができる」と考える。このような行政・専門家に向けたエレメントグルーピング型の活用が考えられる。

また、“自分史”は、行政・専門家が地域に合った活動を創出するため、プライオリティを検討したり、生活スケールを考慮した計画単位の見直しをしたりするためのデータとして活用できるのではないかと考えている。活用のためには、住民同士の共通認識を醸成していくプロセスが必要となる。“自分史”はあくまでも個人の記憶であるが、本調査で扱った春日井の“自分史”サークルで描かれている会誌を作成するプロセスには個人の記憶が複数人に共有され共感を生むといった、行政・専門家が住民との合意形成を図る際に必要な住民の共通認識を醸成するプロセスを含んでいると言える。

活動の具体策としては、まちにおいて守り育むべき価値を特定した上で、それを増幅させるための活動や、破壊しようとする現象に対抗して持続させるための保全的活動、喪失された要素を復元させるための創造的活動などが挙げられる。

7.2.基礎的洞察からみた「隠された記憶」の表出

本研究では、住民の記憶を収集するプロセスにおいて、過去の経験が幅広く記された“自分史”から、一般的な調査・分析手法では明らかにすることが難しい多様な「場所」を把握できるのではないかという仮説のもと、“自分史”の基礎的な洞察をした。結果から、以下のことが明らかになった。

“自分史”サークルへのヒアリング調査により、その実態として、月に 1～2 回ほど開催される月例会において、個人の過去のエピソードを会員全員に共有するプロセスを含むことが明らかになった。図 21 における「④共有」のプロセスとして示している。これにより、会員同士が他人のエピソードによって書き手自身の想起が促されているのではないかと考える。すなわち、“自分史”には住民が「忘れてしまった」「覚えていない」などの記憶されていない要素、つまり住民にとって「話せない記憶」が顕在化されているのではないかと考えられる。

また、政治や宗教などの言及によって社会的な意味を生んでしまうような記憶、つまり「話すべきではない記憶」は、個人の意識、または月例会の場での他者の指摘によって執筆が抑制されている実態が明らかになった。図 21 における⑤「制限」のプロセスとして示している。ここで抑制される要素は住民意識の中に留まることになるが、その潜在によって他の要素が言及しやすい心地よい環境が整っているのではないかと考える。そのため“自分史”には、そのような環境で描かれた多様なエピソードが描かれているのではないかと考える。具体的には、悲劇や失敗などに関する思い出したくない記憶、つまり「話したくない記憶」と、住民自身が価値を認識していなかったり話す機会がなかったりする記憶、つまり「話さない記憶」が描かれているのではないかと考える。

以上の結果から、“自分史”は、まちづくり活動における記憶を収集するプロセスで、一般的な調査・分析方法では言語化されにくい要素を含む情報源として機能する可能性は高いという洞察を得た。

また、“自分史”サークルの会員に対するアンケート調査より、“自分史”の活動を通じて、過去の生活地域に対する認識や思いの変化があることが明らかになった。その変化として、地域に対する愛着が高まりや地域文化を再認識、生活圏の再認識などの効果が発現することがあり、参加の回数を重ねることで、地域社会に対する帰属意識が強化されるといった効果も発現されやすくなる傾向があった。

これを踏まえ、本研究では“自分史”を活用する際の基礎的な洞察として“自分史”の副次的な効果を分析したが、結果から、まちのに対するイメージの再構築による定住意識の促進に寄与するのではないかと考える。

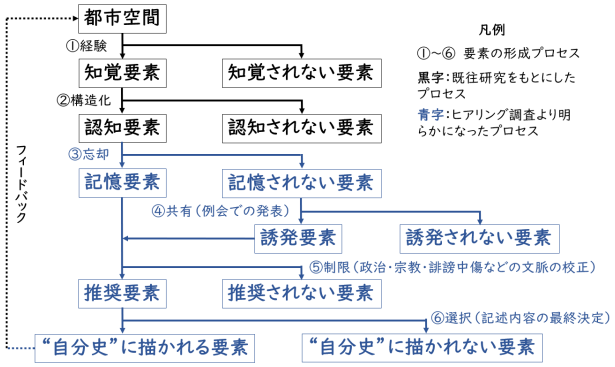

図 21　「空間」が“自分史”に描かれるまでのプロセス（筆者が仮説的に作成）

7.3.住み手に向けての“自分史”活用

“自分史”は、地域の「外の人」がその地域の魅力に気づくためのデータとして、活用ができるのではないかと考える。本研究では記憶を収集するプロセスにおいて「隠されやすい記憶」が“自分史”にどのくらい表現されている

かについて着目したが、その表現がなされている可能性は高いという洞察を得た。そのため、“自分史”から視覚化された情報は、まちの景観やお店、文化や行事などの隠れた魅力の発見に役立つのではないかと考える。

活用を検討する上では、まちに対するポジティブな記憶が機能することが予測される。例えば、春日井市の北部地域では、春日井東高校・愛知県警察学校・愛知学園の桜の木を見て、うきうきした気分になった様子が抽出された。こうした様子をまとめたマップの配布やSNSでの公開を通じて「外の人」に伝えることで、今まで知らなかったまちの魅力を知る機会となり、小さな観光行動の創出や、移住の検討に繋がっていく可能性があると考える。以上のようなビジタープロモーション型の活用が考えられる。

また、“自分史”は、生活地域の人やお店などにまつわるディープなストーリーを発見し、地域の「中の人」の共感を呼ぶためのツールとして活用ができるのではないかと考える。本研究において、“自分史”活動は悲劇や失敗などの「話したくない記憶」が描かれている可能性を示唆している。このことから、生活地域の人やお店などで過去に起こった出来事について、住民に共有させるツールとして活躍するのではないかと考える。

活用を検討する上では、まちに対するネガティブな記憶が機能することが予測される。例えば、西部地域における春日井市民病院では、治療に関して不安や恐れを感じている様子が抽出された。このネガティブな感情に関して同じ体験をした市民と共有することで、連帯感を促進し、住民同士の結びつきが強くなることが考えられる。さらに、地元の特産品・文化などのエピソードが抽出され、それに共感した場合、新しい事業者の発見に繋がる可能性があると考える。以上のようなストーリーテリング型の活用が考えられる。

7.4.今後の展望と知見の限界

本研究は、“自分史”を活用する上での基礎的な洞察をした上で「場所」を抽出する新たな手法の有効性を示すことで、住民にとって大切な要素を捉えるための1つのプロセスの構築を目指した。今後の展望を図25に示す。

日本自分史センターの蔵書を活用した分析に関しては引き続き進めていくことで、収集する情報の量を増加させることができると考えられる。その際、どのような対象に見せるか、その上でどのような情報を抽出すれば良いのかといった情報の質を検討し、視覚化していくべきであると言える。具体例として、行政・専門家に対してはまちとしてどのような価値が存在しているのかを把握できるようなソーシャルイシュー型、「外の人」に対しては隠れた魅力が発見できるようなビジタープロモーション型、「中の人」にまちのエピソードに共感してもらうストーリーテリング型など、活用を見据えた視覚化が求められる（図22左図）。

また、“自分史”活動の参加者は主に高齢者であり、年齢層が限定されている。高齢者は長期的な記憶の中から過去を話すことが可能であり、参加対象として適していると言えるが、若者参加を促進することで若者の定住意識を促進に繋がることが期待されるため、若者に対する呼びかけも必要であると考える。その際、まちの想い出に関する自分史を作成してもらう「自分史×まちづくり」をテーマとしたワークショップを開催することで、若者が参加しやすい環境の構築と、まちの出来事と直接的に関係する記憶の効率的な収集ができるのではないかと考える（図22右図）。

“自分史”はあくまでもあいまいな記憶に基づく個人の主観であり、嘘も描かれる可能性を含む。そのため、客観性が欠落し、計画へ反映させるプロセスは確立されていないのが現状である。ただし、個人の記憶の集合が まちの記憶であるという認識を踏まえた上で、調査で明らかになった“自分史”を執筆する際の、市民同士が共通認識を育むプロセスが、公共性のある価値意識を明らかにする一助となるのではないかと考える。

さらに、個人の記憶を収集するため、心の中に踏み込みすぎると、プライバシーを侵害してしまう恐れもある。地域の個人の記憶にどこまで踏み込むべきか、その介入性を判断し、記憶を扱っていく必要がある。

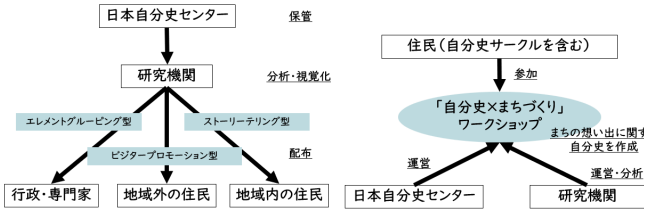

図22　今後の展望に関して

謝辞

本研究を行うにあたり、指導教授の岡本先生や副査の磯部先生・服部先生に適切に指導いただきました。また、かすがい市民文化財団自分史センターや春日井市内の“自分史”サークルに関わっていただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

注

1）日本自分史センターでのヒアリングの中で、“自分史”の新たな活用場面を検討していることが実態として明らかになった。

2）語の共起関係は、一緒に出てきやすい語を示している。KHCoderのデフォルト設定を用いてにより共起関係を示すJaccard係数を算出している。

参考文献

1）E.Relph：場所の現象学 - 没場所性を越えて-，ちくま学芸文庫，1999

2）日本建築学会：生活景 身近な景観価値の発見とまちづくり，学芸出版社，2009.3

3）西村 匡達，松本 直司，寺西 敦敏：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究，都市計画論文集，第27巻，pp.721-726，1992

4）茂原 朋子，渡辺 貴介，十代田 朗：青年の“原風景” の特性と構造に関する研究，都市計画論文集，第26巻，pp.457-462，1991

5）イーフー・トゥアン：空間の経験―身体から都市へ―，1988

6）渡辺 成博，松本 直司，高木 清江，心象風景の形成過程と現実の空間形態，都市計画論文集第31号，pp.175-180，1996.10

7）尾野 薫，星野 裕司，増山 晃太：都市において記憶された経験を捉えるための一試論，土木学会論文集D1（景観・デザイン），第71巻，1号，pp.133-150，2015

8）筈谷 友紀子，阿部 大輔：空間の残存と悲劇の記憶の継承の関係についての考察 空間の保存プロセスに着目して，都市計画論文集，第58巻，3号，pp.937-944，2023

9）筈谷 友紀子：地域住民の個人的体験・記憶における文化財との関わり方について- 川越市における地域の歴史遺産めぐり講座の事例から -，日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集，第21巻，pp. 69-72，2023

10）李 子贏，青木 俊明：住民にとってのポジティブ・ネガティブな場所の特徴に関する研究：場所の記憶によるアプローチ，都市計画論文集，第58巻，3 号，pp. 727-734，2023

11）日本建築学会：地域文脈デザイン まちの過去・現在・未来をつなぐ思考と方法，鹿島出版会，2022.11

12）後藤春彦：無形学へ かたちになる前の思考，株式会社水曜社，2017.4

13）釋 七月子：「自分史」の基礎研究―自分史の動向と作品分析―，名古屋大学，2018.3

14）色川大吉：“元祖”が語る自分史のすべて，河出書房，2014.12

15）引地 博之，青木 俊明，大渕 憲一：地域に対する愛着の形成機構–物理的環境と社会的環境の影響–，土木学会論文集D，65 巻2 号，pp. 101-110，2009

16）永田 佳裕，日高 圭一郎：「絵になる景観」の視点場環境に関する基礎的研究，学術講演梗概集，2011巻，pp.239-240，2011.7

17）大﨑 雄治，吉川 眞，田中 一成：ソーシャルメディアを活用した景観の分析と評価 観光地を対象として，日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集，15 巻，pp. 13-16，2017

18）槻橋 修，平尾 盛史：被災地における喪失した街空間の記述に関する試論 岩手県大槌町町方地区・復元模型ワークショップを通して得られた証言を基に，都市計画報告集，12巻，2号，2013